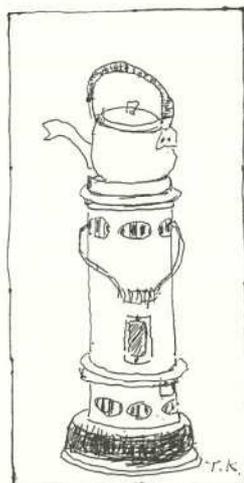


OMNIBUS

大阪医科大学図書館報 / 大阪医科大学附属看護専門学校図書室報

| C | O | N | T | E | N | T | S |
|-----------------------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|----|
| 落葉〔大槻勝紀〕 | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | 2 |
| ほんとうの話?〔玉井浩〕 | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | 3 |
| 精神の潤滑油〔粟津真麗〕 | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | 5 |
| “ラダ”と出逢って〔原田祐子〕 | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | 6 |
| “今”という瞬間〔森島宏子〕 | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | 7 |
| 時間外開館の利用実態 | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | 8 |
| 他大学図書館訪問記(3)(神戸大学附属図書館医学部分館の巻) | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | 9 |
| 書評「丹田呼吸健康法」改訂版〔土井一宏〕 | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | 10 |
| 「有機リン中毒(サリン中毒)」〔福田市藏〕 | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | 11 |
| 第4回医学図書館研究会・継続教育コースに参加して〔田嶋泰子〕 | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | 14 |
| 我が図書館のホームページもインタラクティブになれるのか〔大野浩二〕 | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | 14 |
| 本学教職員等著作寄贈 | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | 15 |
| お知らせ | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | 16 |
| 図書館業務日誌 | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | 16 |
| 編集後記 | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | _____ | 16 |



落 葉

大 槻 勝 紀



昨年の今頃、天気の良い朝を選んで、本部キャンパスの樹木を写真に撮った。私は樹木の名前にあまり詳しくはないが、レンズを通して見た正門や旧学Ⅰ講堂付近のイチヨウ、あるいは北門と旧化研の間にあるメタセコイヤに心が奪われた。紅葉や落葉の美しさだけでなく、樹木の大きさに驚かされ、普段、何気なく見ている木々に本学の歴史の重みを感じた。

今まで細胞死を表現する医学用語としてはネクローシス (Necrosis) しかなく、あまり「死」については学問的にも注意が払われなかった。1972年、英国の病理学者であるKerrらにより、電顕による幾つかの微細構造の特徴から、ネクローシスとは異なる細胞死としてアポトーシス (Apoptosis) が命名された。アポトーシス (Apoptosis) はギリシヤ語に語源を有し、apoはoff, ptosisはfallすなわち英語でFalling offに置き換えられる語である。丁度、樹木から落葉する現象を表現したものである。しかしその語彙には、落葉した木の葉は病気により死んだのではなく、翌春の新芽のためのエネルギーを蓄えるために自ら命を絶つといった意味が込められている。その日本語訳は「細胞の自殺死」であるが、私はよく講演で「アポトーシスは、死んで花実が咲く細胞死」と言っている。当初、アポトーシス研究は一次のブームと考える研究者も多かったが、現在では独立した研究分野を確立しつつある。その理由としてはアポトーシスが偶発により生じた細胞死ではなく、遺伝子のレベルで調節された細胞死であるため、遺伝子学、分子生物学の急速な進歩とその成果により、その細胞死が生理学的に重要な意義を有することが明らかになってきたことが挙げられる。

昭和57年7月から4年間、私は産婦人科の大学院生として解剖学第一講座に学内留学した。その動機は産婦人科で「Krukenberg腫瘍 (転移性卵巣癌の一つ) の転移機序」を研究していたことに始まる。転移機序としてリンパ行性転移がその候補の一つに挙げられていた。しかし、当時、組織切片上で毛細リンパ管と毛細血管を鑑別することは困難で、研究に行き詰まりを感じていた。当時の解剖学第一講座では、本学初代校長の足立文太郎先生、解剖学講座の初代教授木原卓三郎先生へと受け継がれてきたリンパ管の研究が鈎スミ子教授 (現名誉教授) により精力的になされていた。6月に、当時の産婦人科の杉本 修教授 (現名誉教授) あるいは植木 實助教授 (現教授) に伴われ、鈎先生の教授室を訪れた日のことを今でもよく覚えている。その折りに鈎先生から、電顕でのみ卵巣内リンパ管の同定が可能であることを聞かされ、大いに希望を持った。しかし同時に、ガラスナイフによる超薄切片作成に伴うテクニックの煩雑さと困難さ (当時はまだ誰もダイヤモンドナイフを持っていなかった。) をととうと語られた。到底、不器用な私には無理だと判断して、鈎先生に手技が簡単な走査電顕で研究をしたい旨を述べたところ、少し慌てたような顔をされ、「あなたは4年間も解剖学講座で研究をするのですから、なんとかなります。」と叱られた。いざガラスナイフで超薄切片を作成しても、なかなか良い切片が得られず、出来た切片を電顕で観察しても見るに耐えないものばかりであった。そうこうするうちに鈎先生から来年4月の解剖学会で演題を出すように言われて困った。夏頃から、生まれて初めて2-3ヶ月で体重が4-5kg減少したため、癌だと思

い込み、CTを撮った。私には無縁と思っていたストレスがその原因と解ったのは、もう少し後になってからである。解剖学のスタッフに超薄切片作成の悩みを相談すると、「誰もが経験する壁です。夏は温度も湿度も高く、なかなか上手く薄切はできないものです。」と慰められた。冬になると、学会抄録の期限も迫ってきた。ある夜、膝掛けの毛布と小さな電気ストーブを大阪のどこかに買いに行った。それ以後、冬の深夜に冷房をかけ（温度と湿度を下げるため）、膝に毛布、足下にストーブを置き、超薄切片作りをし、なんとか学会に間にあった。今では、スタッフの数だけダイヤモンドナイフが用意されているため、誰もが簡単に超薄切片が作れる環境にあることを思うと夢のようである。その頃、種々の臓器の細胞を電顕で観察する機会を得たが、それが今日の私のアポトーシス研究に役立っている。あの膝掛けの行方は知らないが、何故か電気ストーブだけは今でも立派に秘書の足下を暖めている。

今から6年前に吉田康久先生（衛生学・公衆衛生学講座、現名誉教授、法人理事）の教授室におじゃました際、先生の机に一冊の医学雑誌が置かれていた。先生は「君の役に立つなら、差し上げるよ。」と言われ、持ち帰った。その中に掲載されていたアポトーシスのレビューを読んだ時の感激が、今でも鮮明に残っている。

「何故、ヒトにのみ月経が起こるのか？」

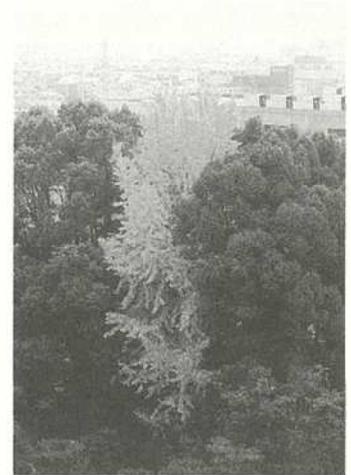
「初潮が10才で、閉経が50才とすると、人生500回の生理に、何故、ヒトの卵巣には約40万個の卵が存在するのか？」

「何故、予定日近くになると、破水して胎盤が娩出するのか？」

私が産婦人科時代から抱き続けてきた疑問も、今では私のアポトーシス研究の格好のテーマになっている。

最後に、イチヨウやメタセコイヤの落葉の写真は、私の講演会の最初のスライドを飾っている。

（おおつき・よしのり 第一解剖学教授）



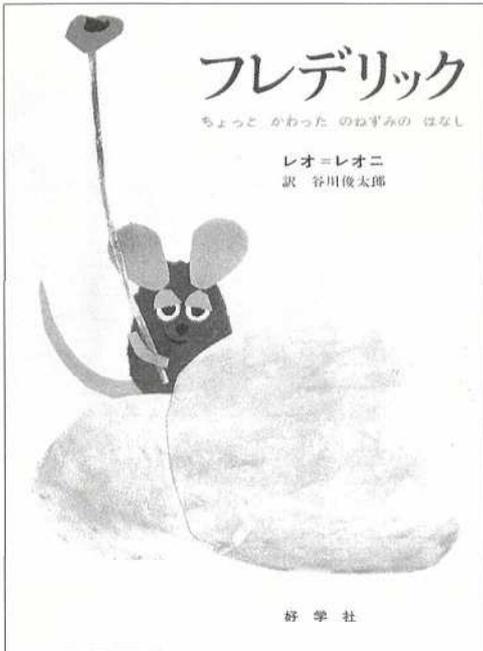
正門のイチヨウ

ほんとうの話？

玉井 浩

我が子に絵本や童話を読み聞かせる年齢になると、何十年か前に自分も同じように親から読んでもらったことをなつかしく思い出すものである。そして、あやふやにしか覚えていなかった部分を再確認する楽しみも味わうものである。そのように以前から童話には親しみを持っていたが、最近、それらについて興味深く思えることがあった。ひとつはグリム童話の代表的作品である「白雪姫」、もう一つはイソップ物語の「ありとぎりぎりす」である。ともに古典的なお話で、だれでもその内容は知っている。しかし、現代の白雪姫は第7版であり、初版では毒リンゴを食べさせたのは継母ではなく、実母であったことはあまり知られていない。最近、グリム童話の初版の日本語訳が出版され、読む機会があった。それによると、国中で自分が最も美しいことを自他ともに認め、いつも

壁の鏡にむかって、「鏡よ、鏡。国中でもっとも美しいのは誰？」と尋ね、「あなたが一番美しい。」と言われて満足していた妃が、やがて自分より美しくなった実の娘に嫉妬をいだき、娘を追放し、殺すように命令する。しかし、7人の小人に何度となく助けられると、今度は妃自らもの売りのおばあさんに変装し、毒リンゴを食べさせた。死んだ白雪姫がガラスの棺に入れられているのを一人の若い王子が見つめて譲り受け、お城に運んでこさせた。いつも棺を担いで歩かされている召使は腹をたて、棺を開けて白雪姫を持ち上げ、白雪姫の背中をポンとたたくと、呑み込んでいた恐ろし



いリンゴの芯がのどから飛び出し、白雪姫は生き返った。王子との結婚式では妃は、真っ赤に焼かれた鉄の上履きをはいて、死ぬまで踊らなければならなかった。この初版では実母が白雪姫を殺そうとしているが、教育的、商業的配慮から第2版以降は継母に置き換えられている。グリムのほかの話にも継母の出番は多いが、そのほとんどが悪役となっている。他のグリム童話の作品も同様に、時代とともに変遷していることが多く、読み比べると興味深いものである。(童話のもう一つの楽しみ方)

もう一つの代表的なものにイソップ物語がある。「ありときりぎりす」はその中でも有名である。夏の間中歌を歌って過ごしていたきりぎりすは、冬になり食べ物に困ってありの家にやっとたどり着いていた。「ひと口でいいから食べ物を分けてください。」と頼んでもありは分けてくれ

ないどころか、「夏の間中歌を歌っていたのなら、今度は冬の間中踊っていたらどうだい。」と皮肉を言う。備えあれば憂いなしの教訓めいた内容である。勤勉さを教え込むのには好都合の様に思える。しかし、このありたちはあまりにいじわるでちっとも優しくない。困っているものに優しい言葉さえかけられない、まさしく排除・切り捨ての世界の反応である。現代のいじめにも通じるのかと思うと少しぞっとする話である。それに比べ、レオ・レオニ作の「フレデリック」という作品は全く逆の予想外の展開で私をほっとさせてくれる。冬に備えて一生懸命えさを集めている野鼠の中にちょっと変わった一匹のフレデリックという野鼠がいた。他のみんなが腹をたてて、どうして働かないのか尋ねると、「ほくもちゃんと働いているよ。ほくは暗い冬の日のためにお日様の光をたくさん集めているんだ。」とか、「灰色ばかりの冬の日のために色をたくさん集めているんだ。」とか、「長い冬のために言葉をたくさん集めているんだ。」とか言うのである。イソップの話ならこの先の展開はお決まりであるが、この後の展開は全く違っている。えさを食べ尽くした野鼠たちは、暗くて寒いしがきの中で、おしゃべりする気にもならないでいた。その時、みんなはフレデリックのことを思い出して尋ねた。「君が冬になる前に集めていたものはどうなったんだい。」と。そこで、フレデリックは答える。「目をつむってごらん。君達にお日様をあげよう。ほら、感じるだろう燃えるような金色の光。」すると、野鼠たちはだんだん暖かくなっていった。まるで、魔法のようである。「今度は色はどうなったんだい。」とせがむと、「春のすばらしい色とりどりの風景の話しよう。」すると、みんなの心の中はぬり絵のように明るくなった。今度は言葉をせがんだ。す

ると、まるで詩人のようにみんなにお話を聞かせるのである。イソップに慣れ親しんだ人達には衝撃的な、優しさに溢れた作品なのである。いつのまにか自己中心的となり、いじめがあっても見てみぬふりをする現代社会にあって、この作品にみられるメッセージは、人々の多様性を尊重し、ほのほのとさせる優しさ、すなわち現代人の忘れかけている基本的な愛そのものなのである。絵本としては「フレデリック」の方が「ほんとうの話」であってほしいのである。

また、有名な童話をパロディー化して、さらにその続きを書いた楽しい童話もある。斎藤隆介の「負け兎」はカメに負けた兎の話である。兎村から仲間外れにされた負け兎が死ぬ気で狼をやっつけて、再び兎村の仲間たちに仲間入りができるように思えるまで自信を取り戻していく話である。

ジョン・シェスカ作の「3びきのコブタのほんとうの話」もパロディーとして面白い。これは例のオオカミに事の真相をしゃべらせる構成になっている。「自分はちっとも悪くはない。全部でっちあげだ。ただ、大好きなおばあさんのためのケーキを作るのに砂糖が足りなくなって、ちょっと借りに行っただけなんだ。カゼをひいていて、わらや木の枝で作った家の前で大きなくしゃみをしてしまったから家が吹きとんだのだ。ただ、3番目のコブタはれんがの中において、砂糖を貸してもらおうと声をかけてみたんだ。すると、コブタのやつはコップ一杯の砂糖を貸してくれるどころか、『とっとと消えうせろ。おまえのおばあちゃんなんかそくらえ!』と言いやがる。その時くしゃみがでたんだが、さすがにれんがの家だけあってびくともしない。頭にきて家をこわそうと暴れていたんだ。すると警察がくるし、新聞記者はおれのことを悪いオオカミだと書きたてたんだ。これが本当の話。悪いのはオレじゃない。』

こうなると、もうあらゆる童話のパロディーや続編を想像してしまう。

童話でも時代とともに意図的にあるいは計らずも内容が変わってくることもあるように、歴史的事実でも時代がかわり立場がかわるとその評価はかわる。

みなさん、眠れぬ夜は童話の創作で時間をつぶしてはいかがですか。

(たまい・ひろし 小児科学教授)

精神の潤滑油

栗津真麗

心のゆとりを失った時程、人間が醜く思える時はないと私は思う。

入学して以来、図書館に足を運べば、決まって向かうのは医学書の棚であったり（小知故、欲張ってあれもこれもと小脇に抱えるうちに悲惨な状態に陥るのが私の常である）、日頃、貯めておいたノルマの消化に精を出すばかりで、とてもではないが他の分野の棚に手を伸ばす余裕がなかった。

キンモクセイの薫り深まるなか、拍車をかけてその傾向は強くなった。食欲は二の次(?)にして勉学の秋とばかり、夏の余韻を引きずったままの日頃の学習態度を窘めるべくして、毎週、容赦なくやって来る試験、あるいは実習に向けての準備に追い立てられ、私は危機感を強めていった。なによりも私が焦燥の念を高めていったのは徐々に心の潤いが枯渇していくのを感じた所以であ

る。

そんな折り、ふと手に取った本が文学作品であった。試験を前提とする国語を強いられている時は、唯一の答えを求めて膠着語である日本語のもどかしさに辟易したものだ。その強迫観念から逃れ、じっくり味わうことを覚えたのは恥ずかしながらついこの間のことなのだが、久しく手に取ることのなかったそれは確実に私の錆びついていた心を潤してくれた。そう、まさにこれこそ文学の持つ魔力によるカタルシスである。その元祖、ギリシャ神話やシェイクスピアなんかは視覚よりも聴覚に訴えるものが多く、さらに翻訳されることによってどうしてもその魅力は半減してしまうのは周知のことだが、その真髄に流れるものには変わりはない。

後ろの返却予定日の紙が空白のまま黄ばんでいるのを見ると少し寂しい気もするが、私の危機を救ってくれた本に感謝するとともに、これからも精神の糧となるべく不才の啓発に手を貸して頂きたい。

(あわづ・まれい 第一看護学科1年 図書委員)

“ラダ” と 出 逢 っ て

原 田 祐 子

先日、インドからの留学生“ラダ”がわが家を訪れた。家族共々、少し緊張気味であったのだが彼女の17才らしい、チャーミングな笑顔ですっかり心が軽くなった。何を話せば良いのやらと迷っていたが、彼女の方からインドのことを話してくれた。ものおじせず、常に日本語の会話に耳を傾け、理解しやすい言葉を選んだ英語で話してくれる。そんな彼女の優しさと積極的に取り組む姿勢が、とても爽やかで心地良かった。

また、両親が辞書を片手に懸命に話している様子を見ると新しい姿を発見できたような気がする。第三者が家族の中にとけこむことによって、何かが生まれることもあるのだと思うと、私も看護を目指している者として考えさせられることは多い。文化の違いや世代を超えて人はこんなに素直に話せるものなのだというのを彼女のひたむきな姿から学んだような気がする。慌ただしく日々を追うように過ごしている毎日の中で、彼女と過ごした一日は私に心の潤いを与えてくれたようだ。時々、立ち止まって自分や家族のこと友達のことをゆっくり考えてみる時間をもてるような心のゆとりをもたなければならないとこの時に感じた。一緒にいすぎると見えなくなってしまうもの、それを見つめようとするのはとても大切なことだ。

海辺を一緒に散歩している時、空を見上げると飛行機が一機、飛行機雲を描いていた。彼女が「あれは、インドまで行くのかなあ。」と言った一言が今も心に残っている。彼女といると心が和んでとても優しい気持ちになれる。とても魅力的な人だ。これからきっと、彼女はますます様々な人と出逢いステキな女性へと成長していけよう。私も私なりに、彼女からもらった機会を大切に成長していきたい。

(はらだ・ゆうこ 第一看護学科1年 図書委員)

“今”と　い　う　瞬　間

森　島　宏　子

最近、あることがきっかけとなって、「時が経つのは怖いことだ」と改めて感じるようになりました。

大学に入学してから、早三年が過ぎようとしています。大学に入学してからの私は、特に何という目標もなく、ただ何となく時間を過ごしてきたように思います。

普通、人は何か差し迫ったことがなければ時間を考えることは少なく、すべきこともいつでもできると思い、時間を無駄に過ごして、後になって「あの時ああしておけばよかった」と思うことがよくありますが、私もまさにそのパターンの繰り返しで日々を過ごしてきました。しかし、心の中では、「学生時代は比較的自由になる時間が多いのだから、今のうちにしておけることはしておこう」と思う気持ちが存在している一方で、その“今できること”を見つけることができず、「毎日ただ何となく過ごしている」という自分に苛立ちを覚えてはいたのです。

時間のことを考える時、私はいつも自分にとって忘れられない映画の一シーンを思い出します。その映画は、官僚になるために優等賞を取って卒業することを目標にしている名門ハーヴァード大学の学生である主人公が、大学の図書館の地下に住む浮浪者と出会って「人生における大切なもの」を学ぶというストーリーのものです。その中で、私がいつも思い出すシーンは、ひたすら官僚を目指し、優等賞にこだわる主人公にその浮浪者が、「今に走り続けることそのものが目的になってしまうぞ」と言い、「これが俺の人生だ」とポケットから袋を出してその中の数個の小石を見せ、その石一つ一つについて、思い出を語るシーンです。彼は忘れられない一瞬に出会うたび、その場所にあった小石を拾って大切にしていたのです。そして、その小石を見せることで彼は主人公に教えるのです。忘れたくない瞬間の積み重ねの中に人生はあり。この映画はモノや地位よりも心に残る一瞬一瞬を大事に生きている彼に主人公は次第に心を開いていき、「人生の目的は、自分が誇りに思える理想を実現させること」という新たな価値観にめざめる、という展開になるのですが、特にこのシーンは私には忘れられないほど印象的なシーンでした。

この映画は、三年前、大学受験が一ヵ月後に迫っているという時に観たもので、当時の私にとっては心を揺り動かすほどのものでした。なぜなら、私自身も主人公のように目の前の目標だけを見ていて、一瞬の時間の大切さを忘れかけていたからです。私も主人公と同じように、忘れかけていた大切なことをこの映画の言葉によって学んだような気がしました。この映画の何気ない台詞一つ一つが初めは痛みを伴うものでしたが、それらが静かに心に浸透していく感覚を今でも覚えています。

人間は、忙しい時にも暇がある時にも時間を大きな単位として見るだけで時間は一瞬一瞬の積み重ねであるということを忘れがちです。私も、最近そのことを忘れて時間を無駄に過ごすことが多く、大切な瞬間に出会ってもそれを忘れていたような気がします。しかし、そのことが後になって、後悔と、どうしようもないくらい淋しい思いをもたらすということ、あるきっかけがあって知ることになりました。

今回のことで、映画の印象的なシーンを思い出し、そこで思いました。どうしようもないくらい

の淋しさを感じないためにも、感じた時のためにも、私もあの映画で教えられたように人生における一瞬一瞬という小石を大切にしていきたいと。そして“今”という瞬間を大切にしなければ大切な瞬間に気付くこともなく過ぎ去ってしまうのだということ。

だから、“今”という瞬間を大切にしたい気持ちをいつまでも持ち続けようと、今強く感じています。

“今”という瞬間はもう二度と戻って来ないから。

(もりしま・ひろこ 3回生)

時間外開館の利用実態（平成9年4月～12月）

図書館の時間外開館（平日17時から21時および土曜日13時から17時）における入館者数の統計です。各時間帯毎に実際図書館におられる利用者数と、入館システムがカウントした利用者数を比較してあります。

入館システムがカウントした利用者数は、1人で複数入館したものやコピーのみの入館もカウントしています。

1) 平日時間外開館 入館者数

| | 5時台 在館者 | 5時台 システム | 6時台 在館者 | 6時台 システム | 7時台 在館者 | 7時台 システム | 8時台 在館者 | 8時台 システム | 合計 在館者 | 合計 システム |
|-----|------------|-------------|------------|-------------|------------|-------------|------------|-------------|-----------|------------|
| 4月 | 484 | 850 | 375 | 573 | 306 | 366 | 191 | 129 | 1356 | 1918 |
| 5月 | 1020 | 1520 | 805 | 905 | 575 | 636 | 362 | 276 | 2762 | 3337 |
| 6月 | 1213 | 1748 | 940 | 1098 | 655 | 742 | 330 | 266 | 3138 | 3854 |
| 7月 | 836 | 1083 | 741 | 801 | 553 | 577 | 392 | 247 | 2522 | 2708 |
| 8月 | 652 | 747 | 568 | 555 | 397 | 389 | 233 | 158 | 1850 | 1849 |
| 9月 | 1539 | 1985 | 1164 | 1329 | 856 | 913 | 511 | 364 | 4070 | 4591 |
| 10月 | 1546 | 2160 | 1350 | 1440 | 952 | 970 | 564 | 378 | 4422 | 4948 |
| 11月 | 1244 | 1673 | 1144 | 1140 | 751 | 757 | 560 | 405 | 3699 | 3975 |
| 12月 | 841 | 995 | 768 | 795 | 551 | 540 | 378 | 211 | 2538 | 2541 |
| 合計 | 9375 | 12761 | 7855 | 8636 | 5606 | 5890 | 3521 | 2434 | 26357 | 29721 |
| 平均 | 1042 | 1418 | 873 | 966 | 623 | 654 | 391 | 270 | 2929 | 3302 |

8月の入館者数が少ないのは、夏休みと1週間時間外開館を停止した事によると思われます。

2) 平日時間外開館 入館者数平均

| | 5時台 在館者 | 5時台 システム | 6時台 在館者 | 6時台 システム | 7時台 在館者 | 7時台 システム | 8時台 在館者 | 8時台 システム |
|-----|------------|-------------|------------|-------------|------------|-------------|------------|-------------|
| 4月 | 23 | 40 | 18 | 27 | 15 | 17 | 9 | 6 |
| 5月 | 49 | 72 | 38 | 43 | 27 | 30 | 17 | 13 |
| 6月 | 58 | 80 | 45 | 50 | 31 | 34 | 16 | 12 |
| 7月 | 38 | 49 | 34 | 36 | 25 | 26 | 18 | 11 |
| 8月 | 38 | 44 | 33 | 33 | 23 | 23 | 14 | 9 |
| 9月 | 77 | 99 | 58 | 66 | 43 | 46 | 26 | 18 |
| 10月 | 70 | 98 | 61 | 65 | 44 | 44 | 26 | 17 |
| 11月 | 69 | 92 | 64 | 63 | 42 | 42 | 31 | 23 |
| 12月 | 56 | 66 | 51 | 53 | 37 | 36 | 25 | 14 |
| 平均 | 53 | 71 | 45 | 48 | 32 | 33 | 20 | 14 |

平日の時間外開館の入館者数は、やはり5時台が多く、時間が遅くなるにつれて、少なくなっている。

3) 土曜日時間外開館 入館者数

| | 1時台 在館者 | 1時台 システム | 2時台 在館者 | 2時台 システム | 3時台 在館者 | 3時台 システム | 4時台 在館者 | 4時台 システム | 合計 在館者 | 合計 システム |
|-----|------------|-------------|------------|-------------|------------|-------------|------------|-------------|-----------|------------|
| 4月 | 52 | 108 | 42 | 55 | 51 | 48 | 36 | 30 | 181 | 241 |
| 5月 | 110 | 120 | 104 | 98 | 113 | 93 | 100 | 75 | 427 | 377 |
| 6月 | 115 | 138 | 137 | 128 | 133 | 95 | 92 | 69 | 477 | 430 |
| 7月 | 84 | 125 | 108 | 100 | 110 | 95 | 77 | 55 | 379 | 375 |
| 8月 | 87 | 125 | 106 | 126 | 113 | 115 | 95 | 65 | 400 | 431 |
| 9月 | 131 | 215 | 226 | 248 | 188 | 180 | 157 | 118 | 699 | 761 |
| 10月 | 132 | 179 | 149 | 147 | 199 | 185 | 145 | 123 | 625 | 634 |
| 11月 | 180 | 247 | 255 | 233 | 232 | 187 | 160 | 160 | 827 | 827 |
| 12月 | 84 | 121 | 95 | 86 | 107 | 80 | 58 | 74 | 344 | 361 |
| 合計 | 975 | 1378 | 1219 | 1212 | 1246 | 1078 | 919 | 769 | 4359 | 4437 |
| 平均 | 108 | 153 | 135 | 135 | 138 | 120 | 102 | 85 | 484 | 493 |

土曜日については、平日に比べてそれほど極端に入館者が少ないという事は、なくなってきています。

4) 土曜日時間外開館 入館者数平均

| | 1時台 在館者 | 1時台 システム | 2時台 在館者 | 2時台 システム | 3時台 在館者 | 3時台 システム | 4時台 在館者 | 4時台 システム | 合計 在館者 | 合計 システム |
|-----|------------|-------------|------------|-------------|------------|-------------|------------|-------------|-----------|------------|
| 4月 | 13 | 27 | 11 | 14 | 13 | 12 | 9 | 8 | 46 | 61 |
| 5月 | 28 | 30 | 26 | 22 | 28 | 23 | 25 | 19 | 107 | 94 |
| 6月 | 29 | 35 | 34 | 32 | 33 | 24 | 23 | 17 | 119 | 108 |
| 7月 | 21 | 31 | 27 | 25 | 28 | 24 | 19 | 14 | 95 | 94 |
| 8月 | 22 | 31 | 27 | 32 | 28 | 29 | 24 | 16 | 101 | 108 |
| 9月 | 33 | 54 | 56 | 62 | 47 | 45 | 39 | 30 | 175 | 191 |
| 10月 | 33 | 45 | 37 | 37 | 50 | 46 | 36 | 31 | 156 | 159 |
| 11月 | 36 | 49 | 51 | 47 | 46 | 37 | 32 | 32 | 165 | 165 |
| 12月 | 28 | 40 | 32 | 29 | 36 | 27 | 19 | 25 | 115 | 121 |
| 平均 | 27 | 38 | 33 | 33 | 34 | 30 | 25 | 21 | 120 | 122 |

土曜日の時間外開館の在館者数は、3時台が一番多い。



正面玄関

功されました。

建物は、地上6階地下1階の大学医学部・附属病院事務部との共通棟となっており、地階から2階までを図書館として利用されています。

1階玄関を入ると、エントランスホールに続いて、サービスカウンターがあり、目録コーナーおよび情報検索コーナーには、コンピュータが設置されています。

このほか1階には、ブラウジングコーナー・図書館事務室・館長室等があります。

2階は、開架閲覧室で和洋の新作雑誌・単行書・参考図書が配架されています。また、コピー室・グループ学習室2室・個室6室があります。

閲覧机は、個人用は置かれていませんが、窓に面して明るくゆったりと利用できるように配置されています。

グループ学習室は、本学と同様に予約する事により利用する事ができ、個室は常時解放されており、希望者はいつでも利用できるようにされています。

地階は、製本雑誌および単行書の集密書架になっています。また、コピー室も設けられています。

地階にも、個人用のキャレルデスクが置かれているため、利用しやすくなっています。本学では、面積の問題もあったため、地階の書庫にはワゴンしか置く事ができないため、利用者には不便な状態で、空間的にも余裕があり、ゆっくり利用できる環境がうらやましく思われました。

事務部との共通棟となっているため、各フロアのすべてを利用されているわけではありませんがエレベータがほぼフロアの真ん中にあり、利用しやすかったです。コピーは、公用のカードとプリペイドカードを使用するようになっています。

平成9年4月より、研究者を対象に自動入退館システムによる時間外開館を実施中です。本学においても今後の検討課題の1つになってくるものと思われます。

(福広)



二階開架閲覧室



最近同僚の一人が時々胸のあたりが痛むと言ったのを聞いて、非常に心配した。友人が心筋梗塞で亡くなったのを思い出したからである。友人も亡くなる少し前に時々胸が痛むと言っていた。私事で恐縮だが、学生時代その友人と私は、英文科の中で、残念ながら英語の両横綱ではなく、酒の両横綱と呼ばれていた。彼は卒業後は典型的な企業戦士として東京で多忙な毎日を送っていた。私たちはどちらかが出張などの折には、都合をつけて会い、酒を酌み交わした。そんな時彼の口から時々胸が痛むという言葉が出たのである。私も深酒が祟ったのか、かつて肋間神経痛を患い、胸部に痛みが走

ったことがあった。特に冷たいビールを多量に飲むとよくなかった。だから彼の場合も私と同じ神経痛だろうと早合点して、ビールを控えて熱燗にすれば痛みは消える、と無責任なアドバイスをした。彼がテニスを楽しんでいる時に心筋梗塞の発作を起こし、病院に運ばれる救急車の中で亡くなったと聞いたのは、その数カ月後だった。私は彼の訃報を聞いたときに、素人の無責任なアドバイスを悔やむと同時に、心臓発作の恐ろしさを改めて肝に銘じたものだった。

過去にそのようなことがあったので、同僚の胸部の痛みが気になっていた矢先に、心臓病の特効薬は深呼吸だという言葉を見かけた。だからこの同僚にはとりあえず熱燗ではなくて深呼吸を勧めることにした。深呼吸ならたとえ看板どおりの特効薬にはならなくても、まさか命取りにはなるまいと思われたからである。そこで私の本棚で十年間気持よく休んでおられたのを起こししたのが、表記の『丹田呼吸健康法』である。

著者の村木氏は慶応大学医学部を卒業された内科医で、かつて東京大学医学部で東洋の呼吸法を研究されたこともあるという経歴の持ち主である。氏の説明によると、丹田呼吸法とは釈尊が苦行の末に開発された呼吸法（『仏説大安般守意経』）で、白隠禅師がノイローゼと結核の合併症のような禅魔なる業病を克服したのもこの呼吸法だった（白隠禅師『夜船閑話』）そうである。なお釈尊と『仏説大安般守意経』に関しては田中成明著『【実践】瞑想と呼吸法』（朱鷺書房、1991）が、また白隠禅師と『夜船閑話』に関しては村木弘昌著『白隠禅師と「夜船閑話」に学ぶ丹田呼吸法』（三笠書房、1988）が詳しい。とまれ、この呼吸法を発掘して文明の世に蘇らせたのは藤田靈斎師で、師はこの呼吸法の普及のために「調和道協会」を設立した。村木氏はその協会の会長である。

この呼吸法の解説書には同協会の副会長故佐藤道平氏の『丹田呼吸法の実際』（創元社、1986）もある。佐藤氏はインド哲学科出身だけに、調和道の哲学的背景は詳しい。しかしかたに深遠な哲学に裏打ちされていようと、呼吸の方法自体に、古今東西、それほど差異があろうはずがない。ヨーガの呼吸法（佐保田『ヨーガ根本教典』平河出版社、1976）だろうと、神道（花谷・菅田『古神道の気』太陽出版、1991）や密教（山崎『密教瞑想法』永田文晶堂、1974）の呼吸法だろうと、要するに五体を使い息を吸って吐くだけのことである。どれも似たようなものであるのは、むしろ

当然であろう。村木氏の著書の魅力は、何と言っても、氏が永年患者を診てきた臨床医としての豊かな経験と、かつて呼吸法を専門的に研究した医学者としての深い理解を生かしながら、科学的医学的見地から丹田呼吸を解説してくれているという点である。それだけでも本書は一読の価値があるだろう。なお同じ著者によるこの呼吸法の解説を吹き込んだオーディオテープと名刺版ぐらいの図式カードのセット（『丹田呼吸法入門』ごま言房、1989）もある。本書と併用すれば、丹田呼吸法の実修には便利がよいであろうと思われる。

（どい・かずひろ 英語教授）

「有機リン中毒（サリン中毒）」

～地下鉄サリン事件の臨床と基礎～ 家城隆次編著 診断と治療社 1997年
福 田 市 藏



1995年3月20日東京霞が関で起きたこの大事件は、日本全体を震撼させ、許し難い人道上の基本生存権をも侵襲したと同時に日本社会における危機管理問題を提起した点で重要である。事件発生から比較的早期にサリンと特定され、救命救急措置を受け入れた病院の患者対応がどの様に対処し、情報伝達と院内組織対応がどう施行されたのか又サリン中毒に対して医師がどう対応したのかをまとめ上げたのが本書である。本邦のみならず、世界的にも極めて貴重な資料と云わねばならない。

料と云わねばならない。

第一章 地下鉄サリン事件の概要 では、実被害者総数6185名を挙げ、受診病院総数は294病院・医院を数える。入院患者総数は714名、死亡者数12名に及び、聖路加国際病院866名、慈恵會医科大学346名、中島病院297名、虎の門病院266名、済生会中央病院196名、東京警察病院187名、三井記念病院163名、京橋病院159名、日比谷病院152名、東京都立廣尾病院145名、中野総合病院123名、日本赤十字医療Center110名、立正佼成会病院91名、東京都立墨東病院87名、その他の主な収容先を確定し得る。

第二章 神経ガス・有機リン化合物についての項で、(図1)の基礎構造を有する神経毒性を示す有機燐化合物を示し、サリン,パラオクソン,DEP,EPN,パラチオン,マラチオンを挙げ、中枢神経系・末梢神経系のacetylcholine esterase阻害による呼吸筋麻痺を惹起させる。致死率が高い

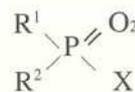


図1

のが注目される。その毒性はタブンを1とすればサリンは2倍、ソマンは4倍と云はれる。VXは5倍である。

第三章 有機燐剤中毒について の項では、内藤裕史先生により詳述されているが、Xの側鎖に就て、I群はXに4級ammonium：エコチオパート等、II群はXにF：サリン,ソマン,DEP（ダイフロス）等、III群はXにCN又はF以外のhalogen：タブン等、IV群はXにその他の化合物で置換され、日本で現在使われている農薬に区分される。有機燐酸基の型によって決まるacetylcholine esterase

の自然回復や老化の速さは、速いもの程予後良好であり、遅いもの程予後不良であると解説している。PAMの使い方が詳述されているが、同時にcarbamat剤によるcarbamil化されたacetylcholine esterase20～40%程度の自然回復促進（30分～60分間でacetylcholine esterase活性の自然回復を得る）を計る事も併記されている。サリンの自然回復率は5%であり、曝露5時間以内のPAM使用が有効である。ソマンの自然回復率は0である事も銘記する必要がある。

第四章 サリン中毒と救急対応の項では 上木雅人先生による執筆であるが、死亡症例2名の他覚所見が詳述され、特に縮瞳の機序に目球への直接作用以外にも、呼吸器より吸収された有機燐の全身的作用も大きく関わっている事を指嗟している。血漿acetylcholine esterase活性値は、死亡症例2名では7 I.U/ℓ、20 I.U/ℓ 以下と顕著に低下し、統計的に優位ではないが、縮瞳径の小さい程 acetylcholine esterase活性の低下が顕著であったとしている。

第五章 サリン中毒に対する救急対応と重症度別の臨床徴候の推移の項は、聖路加国際病院呼吸器内科 蝶名林直彦先生、救急部 石松伸一先生により詳述されており、医師129名、Residents36名、看護婦477名、看護助手、事務職員、synmedical staffを含めた1077名で対処しているが、廊下、講堂（Hall）、conference roomの緊急時病床への変換設備構築にも、特に注意を払う必要がある。直ちにサリン中毒患者診察の際のcheck up listを策定し、自他覚所見、検査所見を勘案の上で（自覚症状）(A) 眼症状、(B) 呼吸器症状☆9咳*11呼吸困難☆12、胸苦しい、(C) 神経症状☆13手足のしびれ、*14痙攣（線維性攣縮）、*15口が思うように動かない、*17歩行困難、*19座っておれない、(D) その他の症状☆20吐き気、*21嘔吐、☆22脱力感、（身体所見）*vital sign、意識level、血圧、心拍数、呼吸数、瞳孔径、対光反射、*神経所見（振戦、痙攣）（検査所見）血算、☆choline esterase活性値、*酸素飽和度、肝機能、腎機能（*入院適応、☆帰宅不可、要経過観察）を調べ、初回診察後1時間後にもう一度check upし確認している。眼症状は入院時92%に確認され、3日後再検時にも86%に残存したが、頭痛は84%から19%に低減し、呼吸困難も60%から0%に、又嘔気、嘔吐も36%から5%に、線維性攣縮も8%から0%に、脱力、不安不穏も12%夫々から0%に低下した。検査所見では、事件当日被害者45名に就て（acetylcholine esterase活性値は平均111±47.2 U/ℓ（健常者ch.E,150 U., <100～250 U/ℓ）と左方移動し、特に重症例の3例で発症時acetylcholine esterase 50 U/ℓ 以下であったのに、約6時間後に100 U/ℓ 以上に回復が確認された。死亡症例2例は、acetylcholine esterase活性値は測定不能乃至10 U/ℓ 以下であった。サリン中毒の重症度を症状別に区分すると、(a) 軽症例では、主にムスカリン様作用が強く、縮瞳、視力障害、頭痛、鼻汁、胸部圧迫感、嘔気、嘔吐、発汗を認め、(b) 中等症例では、ムスカリン様作用に主にニコチン様作用が追加されて、喘息様症状、局所筋攣縮、意識消失、徐脈、呼吸困難が加わる。(c) 重症例では、主に中枢神経系への作用が著しく、尿失禁、便失禁、全身性筋攣縮、麻痺、呼吸停止、痙攣、重度意識障害を来す。

亦、治療に硫酸アトロピン、PAM持続点滴 ジアゼパムを使用して二次災害防止に努めている。

第六章 サリン中毒の臨床：神経内科の立場からの項では、慶應義塾大学医学部救急部 野崎博之先生の執筆になるが、被害者84名の臨床症状に就て、視力障害71%、頭痛49%、呼吸困難感38%、鼻汁30%、全身倦怠感17%、悪化・嘔吐17%、咳嗽12%、咽頭痛11%を挙げ、多数症例で胸部X線像、ECG所見は正常であった。acetylcholine esterase活性値阻害度とサリン被曝の程度を一覧表に

しているが、Ach.E阻害度 20 ± 10 では、縮瞳、鼻汁、眼痛、結膜充血を蒸気被曝とし、胸部圧迫感を全身被曝徴候としているが、 $20 \sim 50 \pm 10$ 程度では、最大限、眼球症状、気管支攣縮を蒸気被曝とし、気管支攣縮を全身被曝の部分関与としている。 50 ± 10 程度では、気管支攣縮の悪化を蒸気被曝とし、分泌液増加（喘鳴、唾液分泌）、縮瞳、発汗、線維束性攣縮の増強を全身被曝の部分関与としている。 80 ± 10 程度では、尿失禁、便失禁、筋力低下、痙攣重積、呼吸筋不全麻痺を蒸気被曝によるとし、 100 程度では、死亡を表記している。大変参考になる意見である。医療従事者の2次被曝に就ても重視しており、聖路加国際病院の意見と同じである。

第七章 サリン中毒；循環器の立場からは東京大学三内、救急部で執筆されており、事件当日、被害者58名、入院4名であるが、重症例に意識障害、縮瞳、筋攣縮、呼吸不全、弛緩性麻痺、頻脈、血圧上昇を認め、acetylcholine esterase 活性値は 174.5 ± 85.1 U/l と低値を示し、脈拍数、収縮期圧は有意に高い。（脈拍数 96.3 ± 36.8 VS 76.3 ± 2.0 bpm）（S.B.P. 161.5 ± 55.5 VS 123.7 ± 18.18 mmHg）、Catecholsとの相関が見られた。

第八章 サリン中毒の眼症状と治療法の項では、聖路加国際病院眼科 山口達夫先生が詳述しておられるが、急性期眼症状として①強度の縮瞳による暗い、②縮瞳と毛様体緊張による見にくさ、③調節力の変調による近くを見る時の眼痛、④毛様病、毛様筋充血、結膜充血による眼痛、⑤縮瞳を伴う後頭部痛、⑥見ようとしても集中力がない、⑦毛様充血、結膜充血による異物感、⑧縮瞳による狭い視野等が挙げられる。要するに縮瞳と毛様充血、結膜充血が主体である。受傷後6ヶ月時点での矯正視力の低下例は無い。

亦 角膜下方3時～9時の角膜に、びまん性変化のみられたものが少数例あった。受傷1年後の眼所見で、眼性疲労34.6%、縮瞳17.3%、視力低下15.4%、対光反応遅延15.4%、網膜電図異常7.7%が残存した。眼科治療として、直接曝露に洗眼、PAM持続点滴、硫酸アトロピン点滴が必須であるが、縮瞳、毛様充血にはミドリンP点眼、結膜充血には、0.02%フルメトロン点眼、びまん性表層角膜症に1%コンドロン点眼を用いる。

第九章 地下鉄サリン事件と「身体症状でmaskされたPTSD」の項では九段中野Clinic中野幹二先生が執筆され、PTSDの米国精神医学会診断基準DSM-IVを抜粋されているが、身体症状が前景に立って、精神症状をmaskした症例が呈示されている。著者は、「[PTSD]は「意味の病」であり、サリンの毒性そのものではなく、サリンと云う毒物の「意味」によっても、被害者を傷つけ、身体症状のかなりの部分が、精神的衝撃によって、「意味」の作用が齎らす悪循環（身体症状＝慢性毒性）により意味作用の強化、増大を来たして「PTSD」を悪化させる等式を断ち切る事が重要である」と論述している。...

以上、本書を一読する事で、サリン中毒の対応処置が完全なものとなる事を希望し、同学の師に奨めたい冊子である。 (ふくだ・いちぞう 第一内科診療教授)

第4回医学図書館研究会・継続教育コースに参加して

田嶋泰子

○はじめに

1997年11月12日（水）から14日（金）にかけて久留米大学附属図書館御井学舎分館において日本医学図書館協会主催、第4回医学図書館研究会、並に継続教育コースが開催された。プログラムは次のとおりであった。

- 1日目：研究発表、並に講演「目録データベースへの新しい試み」（鳥取女子短期大学・宍道勉氏）
- 2日目：研究発表、並に継続教育コース「医学図書館のレファレンスサービス」（慶応義塾大学・市古みどり氏）
- 3日目：継続教育コース「インターネット情報整理学」（鳥取大学・陶山昭彦氏）

○研究発表

図書館間ネットワーク、電子情報、資料探索、利用サービス、といった事柄について、事例報告・研究発表があり、それぞれ活発に討議された。

○講演

必要な図書を探し出すために、図書目録は必要不可欠であると（信じて）図書館員は目録を作成している。だが、それは利用者の要求をほんとうに満たしたものとなっているだろうか、という問いから、コンピュータ時代を迎えた今、もっと理想的な目録データベースを構築できないか、という試案である。従来の目録では、ある図書の書誌事項を知ることができるだけで、その内容まではわからない。しかし、目次や参考文献といった情報をもデータとして持っていれば、具体的な内容を知ることができ、また関連のある図書をも「芋蔓式に」見つけることができる。それにより一冊の本の持つ宇宙を生かすことができる、という構想であった。

○継続教育コース

よりよいレファレンスのためには、調査に使用する資料について、よく理解している必要がある。「医学図書館のレファレンスサービス」では、書誌情報確認のためのツール、所蔵調査のためのツールをはじめ、様々な基本的なツールの特性や、運用のコツについて説明があった。そして従来の資料に加え、今日ではインターネットも重要なレファレンスツールであることに言及された。「インターネット情報整理学」では、インターネットの基礎的なことから、各種検索エンジンを使いわけて、必要な情報を効率よく見つけ出すこと、そして入手した情報を自分のものとして加工していくことの重要性が述べられた。

○まとめ

実のところ、私は機械をさわるのが大の苦手で、インターネットと言われてもつい、尻込みしてしまっていたが、今回の受講で、「何とかなりそう。」と思えるに至っている。今後、より一層、質の高い情報と、サービスの提供ができるように頑張りたいと思う。（たじま・やすこ 閲覧係）

我が図書館のホームページもインタラクティブになれるのか？

大野浩二

帰ってくるなり、和雑誌が机の上を三連の山となして積み上げられている。4日間、大学図書館職員講習会に参加していたからだ。

その山は残業をしつつ、2日ばかりで片付いたが、次の山がさらにできようとしていた。

さて、こうして書いていると和雑誌の係なんだと思われるが、本当は庶務係、いや、ニューメディア情報室管理者、図書館のホームページの一部も作っていたりする。和雑誌係は訳あって代わりをしている状態である。だから、和雑誌係と庶務係の2つの机を持っているのだが、庶務係の机がこれまた見るすべがない。しかも、ごみ箱代わりの段ボールに張った「ごみ箱」というはり紙の余りが、皮肉にも机の上に目だって置かれたままである。

今回の講習では電子図書館の話題を抜きにしたものはなかった。電子図書館といっても、さまざまなレベルがある。図書館という場所にいなくても、アクセスさえできればいつでもどこでもディスプレイを通して本や雑誌が閲覧できるなんてことに近いことをしているところもある。それには、多額の支出と労力を伴うので普通の図書館にはできない。このときの参加者で、まとめた意見は電子化をできることからやっていくということだった。

我が図書館で電子図書館といえば、ホームページがあることを連想する。ここから得られる動的

な情報といえばInternet経由の電子ジャーナルのリンクと案内、新着図書案内と図書館報のHTML化したものがある。しかし、他の図書館の話を知ると、それ以上に進んできているところが多くなってきている。たとえば、WWWブラウザで文献複写の依頼、リクエスト受付、質問の受付と回答などができるようになってきている。このように情報をアウトプットするだけでなく、フィードバックにも対応したインタラクティブなところが増えてきたことである。

利用者からのフィードバックについてはe-mailでという手もあるが、書式が決まっていなくて、利用者は何をどのように記載したらよいかわからないし、図書館側も不十分なデータだけをもってしまったりしては、どうにも対応できない。そこで、WWWブラウザ上でフォームと呼ばれる穴埋め書式を表示させ、必要事項をその穴に埋めて送信してもらうという手段がある。しかし、多くのブラウザで問題なく使ってもらうにはWWWサーバの側にCGIスクリプト（CGI=Common Gateway Interface：サーバ側でプログラムを動かす技術）を処理する細工が必要となるため、便利に使うには自前のWWWサーバが必要となる。

自前のWWWサーバといえば私が実験的にニューメディア情報室のマニュアル配信用に構築しているが、スクリプトを動かすまでには至っていない。残念だが私の頭がそこまで到達していないのである。

今回の講習のそのようなことを思いながら、昼休みにInternetでブラウザしていると、CGIスクリプトが簡単にできるようになるというページを見つけた。読んでいくうちに、だんだんとわかってきた。こうなれば、忘れないうちに学習していき実行あるのみ。私の経験上、こういったものは一目散にやっつけていかなければ、完成しない。途中、邪魔があると、その複雑さから、忘れてしまい各々どこまで出来ていたっけということになって、もう一度ということになってしまうからだ。ほとんど神経衰弱といった感じだ。

述べ3日程かけ、最終的には2種類のサーバ構築と「図書館からのお知らせ」ページをHTML編集なしで更新できるよう、フリーの掲示板用スクリプトを改造して作り上げた。

おかげで机の上はごみ箱のはり紙までも埋もれた状態だったが、お知らせページの更新が簡単になり大幅な作業時間の短縮ができ、今後、更新のもれも無くなるであろうと思われる。一つ有意義なものできたと思っている。

取り敢えず、最初は図書館員用のスクリプトを構築したが、利用者からのフィードバックには、他の係との調整や元となるスクリプトを探さなければならない（あるいはもっと勉強して最初から作る＝時間がない）ので、どうなるやらわからない。なにはともあれ一つ下準備が出来たところであらうか。

あっ、仕事に戻らなくては...

<http://www.osaka-med.ac.jp/~tosho/> 図書館のホームページ

e-mail:lib006@art.osaka-med.ac.jp (おおの・こうじ 雑誌係)

本学教職員等著作寄贈

(平成9年8月～平成10年1月分)

黒岩 敏彦 (脳神経外科学) 星状細胞腫／太田富男監訳、黒岩敏彦ほか訳 1997

芝山 雄老 (第一病理学) 大阪医科大学47同窓会誌／大阪医科大学47同窓会アルバム委員会 1997

米田 博 (神経精神医学) 感情障害；基礎と臨床／米田博ほか 1997

植木 實 (産婦人科学) これだけは知っておきたい子宮筋腫・月経異常；別冊NHK今日の健康／植木實監修 1997

勝岡 洋治 (泌尿器科学) 基本泌尿器科学／勝岡洋治ほか 1997

阿部 宗昭 (整形外科) 整形外科ナースのための知識と実際／阿部宗昭ほか 1997

大阪医科大学仁泉会 大阪医科大学仁泉会会員名簿、1997／大阪医科大学仁泉会 1997

本学総務部庶務課

大阪医科大学創立70周年記念式典・講演会／大阪医科大学 1997 (ビデオ)

大阪医科大学創立70周年記念祝賀会／大阪医科大学 1997 (ビデオ)

本学OBである緒方芳郎 (12期生) 先生より東洋医学関係の図書多数を寄贈していただきました。

国譯本草綱目 (第1-15) 他 366冊 約318万円相当分

お知らせ



1. 看護専門学校図書室

新規受入雑誌タイトル

- 日本看護管理学会誌
1 (1997) 十
精神看護 1 (1998) 十

休刊および受入中止雑誌タイトル

- 生きいきジャーナル 1 (1991) -7 (1997)
こころの健康 1 (1986) -12 (1997)

購入中止雑誌タイトル

- American Literature -69 (1997)
American Scientist -85 (1997)
Biophysics -42 (1997)
IEEE Transactions ; Information Theory -43 (1997)
Journal of Molecular Graphics & Modelling -15 (1997)
Language -73 (1997)
Proceedings of IEEE -85 (1997)
Psychotherapie Psychosomatik Medizinische
Psychologie -47 (1997)
Review of English Studies -48 (1997)
Zeitschrift für Psychosomatische Medizin und
Psychoanalyse -43 (1997)

2. 図書館さわらぎ分室

図書館業務日誌

9月

- 19日(金) エルゼビアEES第1回ユーザーミーティングに館員参加 (於、メルパルク東京)
20日(土) 館報第9号発行
25日(木) 平成9年度第4回図書館合同運営委員会 (於、図書館会議室) 丸善UMIシステム説明会 (於、図書館会議室)

10月

- 8日(水) NTTの電子図書館システムの説明会 (於、図書館会議室)
9日(木) BBC放送関係者が図書館に来館
11日(土) 本学卒業生 (32年卒) が見学来館 (7名)
13日(月) 日本医学図書館協会創立70周年式典に参加 (於、日大会館)
14日(火) 本学法人会計監査 (於、経理課)
15日(水) 医学情報処理センターuser会 (於、第2会議室)
22日(水) 次期図書館システム打合せ会 (於、図書館会議室)
23日(木) 平成9年度第5回図書館合同運営委員会 (於、図書館会議室)
24日(金) 近畿地区医学図書館協議会第3回シンポジウムに館員参加 (於、奈良先端科学技術大学院大学図書館) 日本医学図書館協会資料保存委員会 (於、本学図書館会議室)
28日(火) 学術雑誌総合目録説明会に館員参加 (於、阪大)
30日(木) 平成9年度学術情報センターシンポジウムに館員参加 (於、大阪府立中央図書館)
31日(金) 日本医学図書館協会企画・調査委員会

(於、京都府立医大)

11月

- 2日(日) グルジア共和国トビリシ州立医科大学学長が見学来館 (4名)
7日(金) 日本医学図書館協会教育・研究委員会 (於、本学図書館)
11日(火)-14日(金) 平成9年度大学図書館職員講習会に館員参加 (於、阪大) 日本医学図書館協会第4回継続教育コース、医学図書館研究会に館員参加 (於、久留米大学附属図書館)
14日(金) IMIC創立25周年記念講演会に館員参加 (於、大阪ニューコクサイ)
17日(月) 館報第10号編集委員会 (於、図書館会議室)
19日(水)-20日(木) 日本医学図書館協会総務会、理事会、評議員会 (於、東邦大学医学部)
28日(金) 第70回近畿地区医学図書館協議会例会 (於、神大医学部分館)

12月

- 2日(火) 次期図書館システム打合せ会 (於、図書館会議室)
8日(月) 医学図書館協会臨床症例データベース作成作業打合せ会に館員出席 (於、学術情報センター)
18日(木) 平成9年度第6回図書館合同運営委員会 (於、図書館会議室)
26日(金) 第1回図書館長選挙管理委員会 (於、図書館会議室)

編 集 後 記

今回の館報10号は、新春号として企画しました。トップ記事には大槻教授に、また、玉井教授他沢山の方に、執筆していただき有り難うございました。読者よりエッセイ等に若い人の原稿を募集したらどうかとの意見が寄せられています。皆様からの原稿をお待ちしています。表紙のカットは恒例により今回も北村達郎氏にお願いしました。記事の内容について、皆様からのご意見をどしどしお寄せください。(茂幾)

OMNIBUS「大阪医科大学図書館報/大阪医科大学附属看護専門学校図書室報」

No.10 1998年2月10日 発行

編集・発行 大阪医科大学図書館

〒569 大阪府高槻市大学町2-7

TEL (0726) 83-1221 (代)

(内線2799, 2621)

印刷 大日本印刷株式会社